

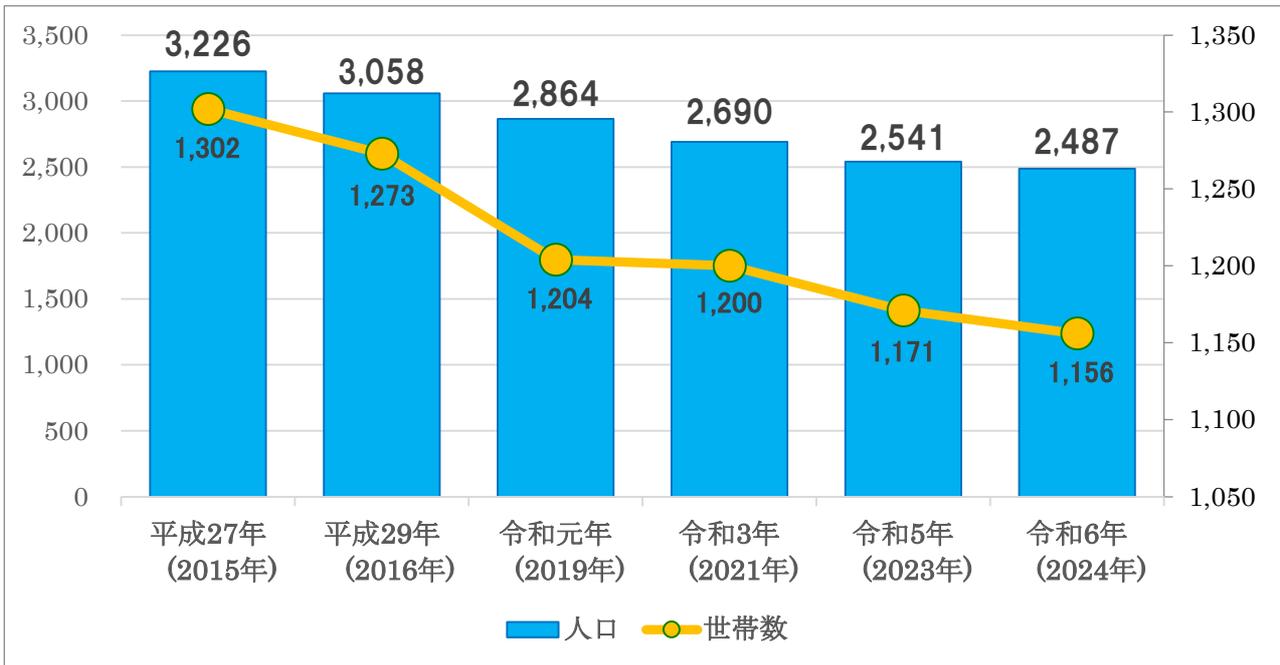
両河内地区 カルテ

データについて

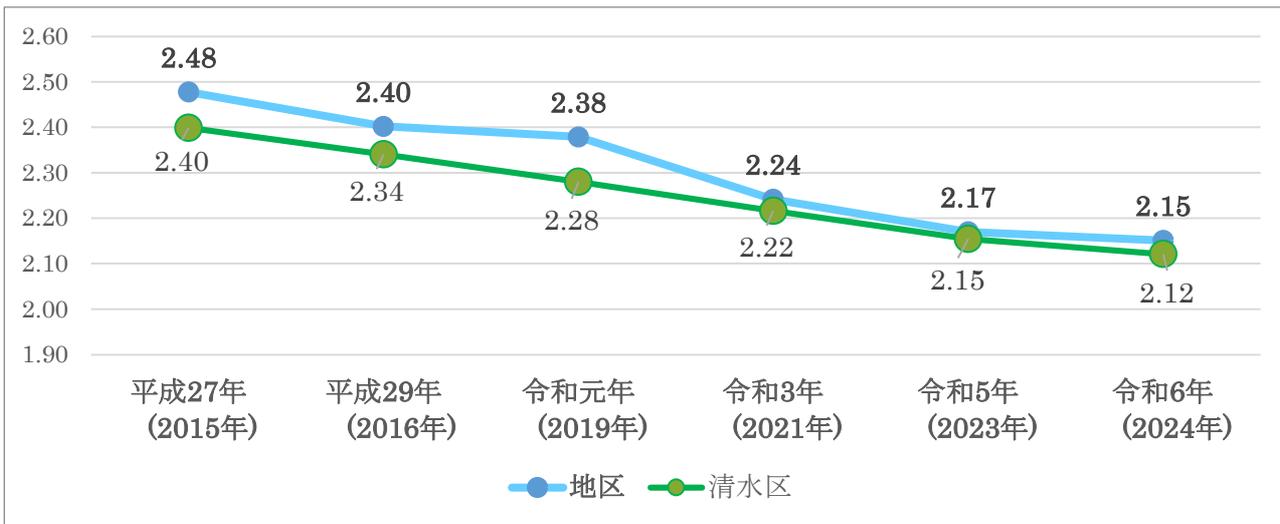
- ・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。
- ・住民基本台帳は各年の3月31日の数値、自治会加入数は各年の4月1日の数値です。
- ・町名は住民基本台帳を採用しているため、自治会名と一部異なる場合があります。

両河内地区の人口特性 令和6年3月 2,487人 1,156世帯 2.15人/世帯

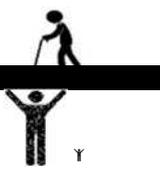
●人口・世帯数の推移



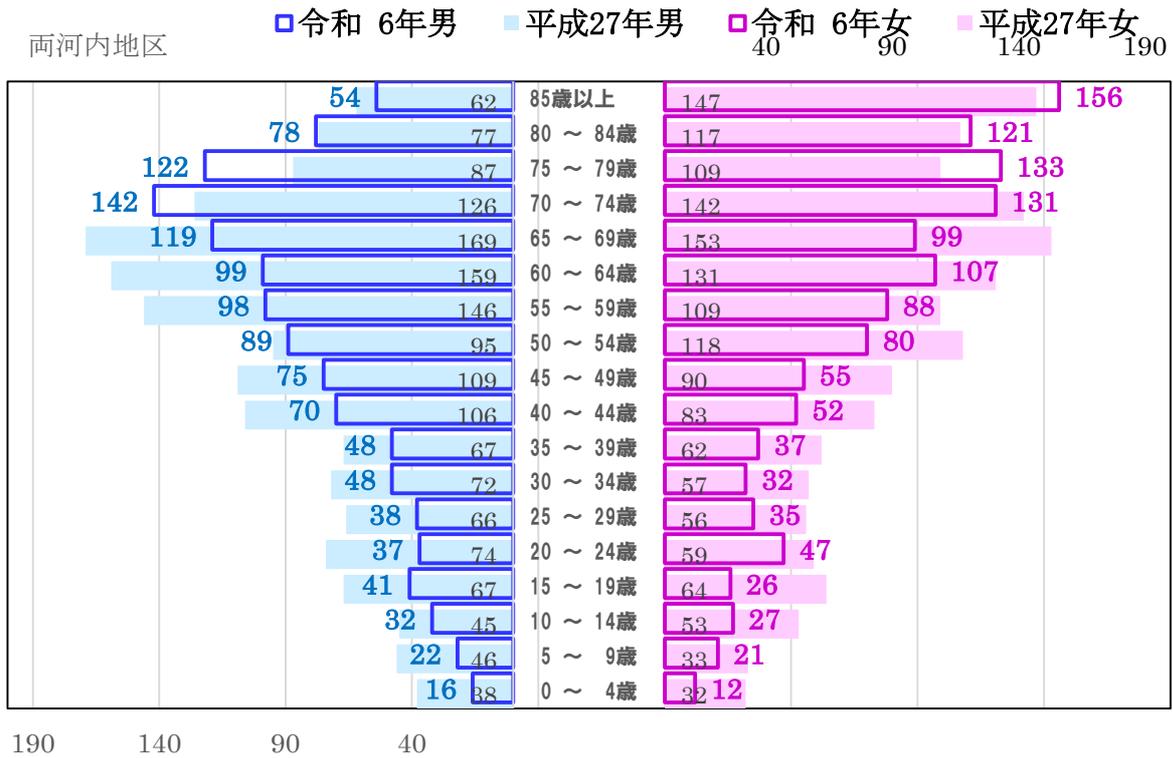
●一世帯当たりの人口推移



●65歳以上の高齢者を支える生産年齢層 (15-64歳)

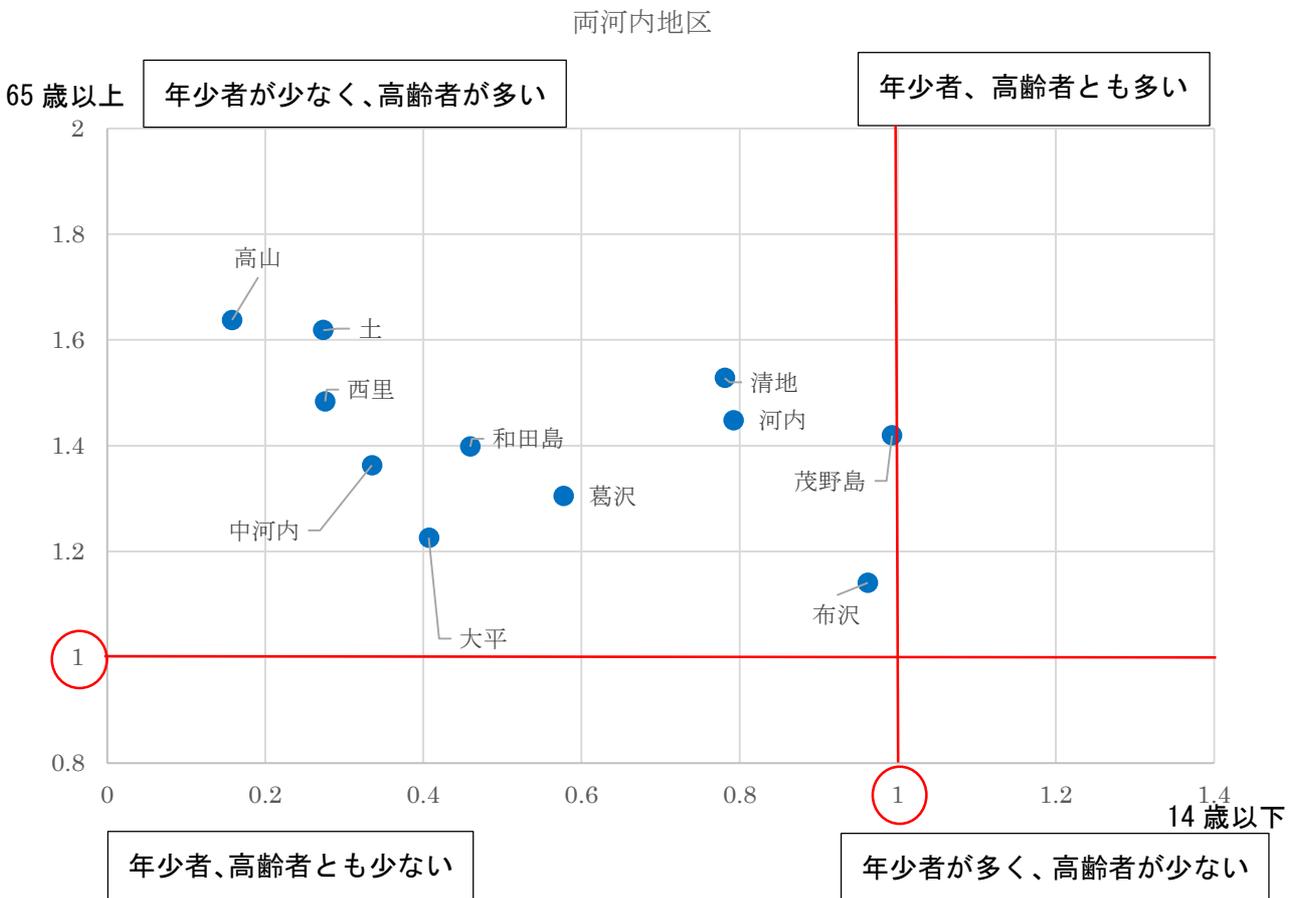
区分	平成27年 (2015年)	令和6年 (2024年)
地区	 1.51人	 1.04人
静岡市	2.16人	1.87人
清水区	1.98人	1.70人

●人口ピラミッド【平成27年(2015年)と令和6年(2024年)の5歳階級別男女別構成】



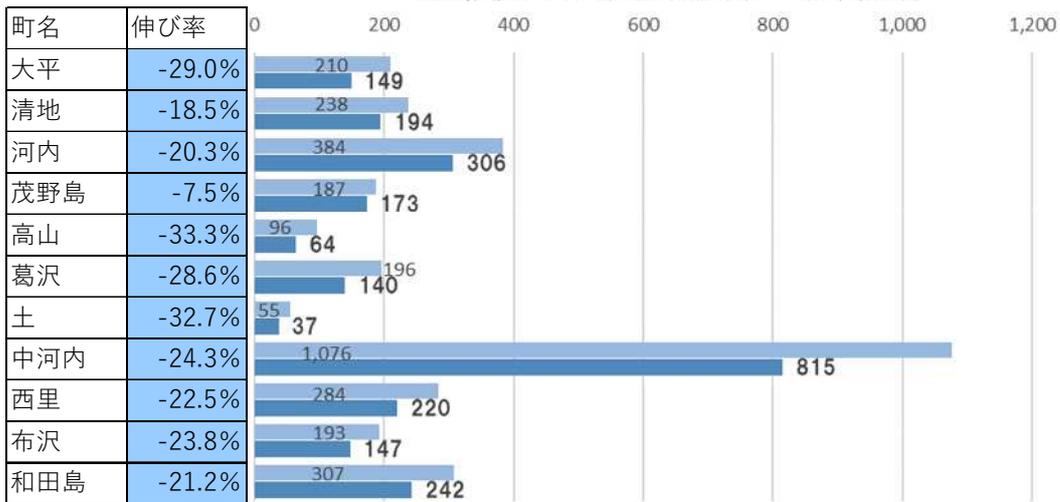
●町別の14歳以下と65歳以上の割合分布 (清水区の平均値を1とした場合)

※年少者(14歳以下)高齢者(65歳以上)



●町別の伸び率と人口推移 【平成27年（2015年）と令和6年（2024年）の比較】

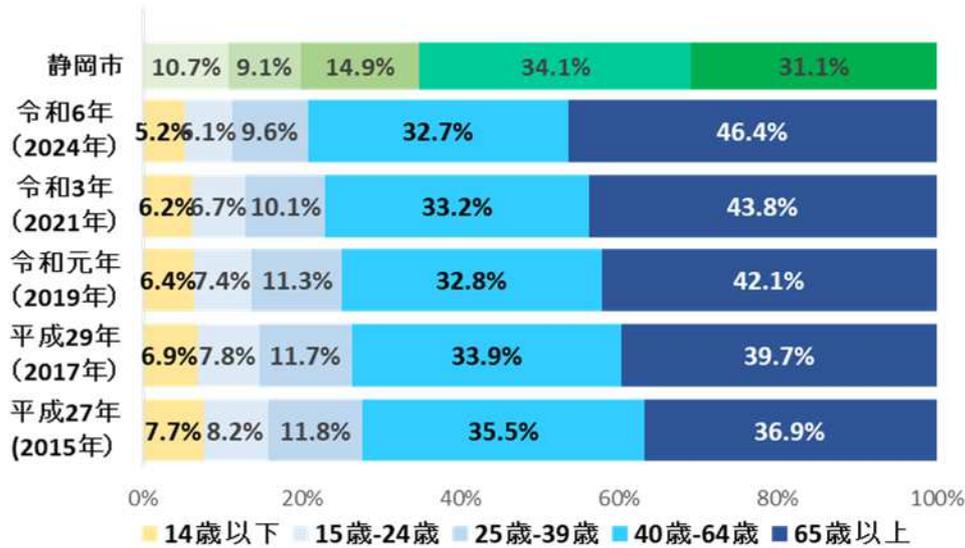
人口推移グラフ（上段平成27年 下段令和6年）



		人 口	
		平成 27 年 (2015 年)	令和 6 年 (2024 年)
両河内地区	-22.9%	3,226	2,487
静岡市	-5.3%	713,564	675,610

●町別人口区分別割合

・年齢5区分別人口割合の推移



※15-24歳は高校から社会人(大学修士課程含む) 25-39歳は社会人(大学博士課程含む)

・令和6年人口3区分別：

市の割合より

青字 14歳以下の割合が低い場合

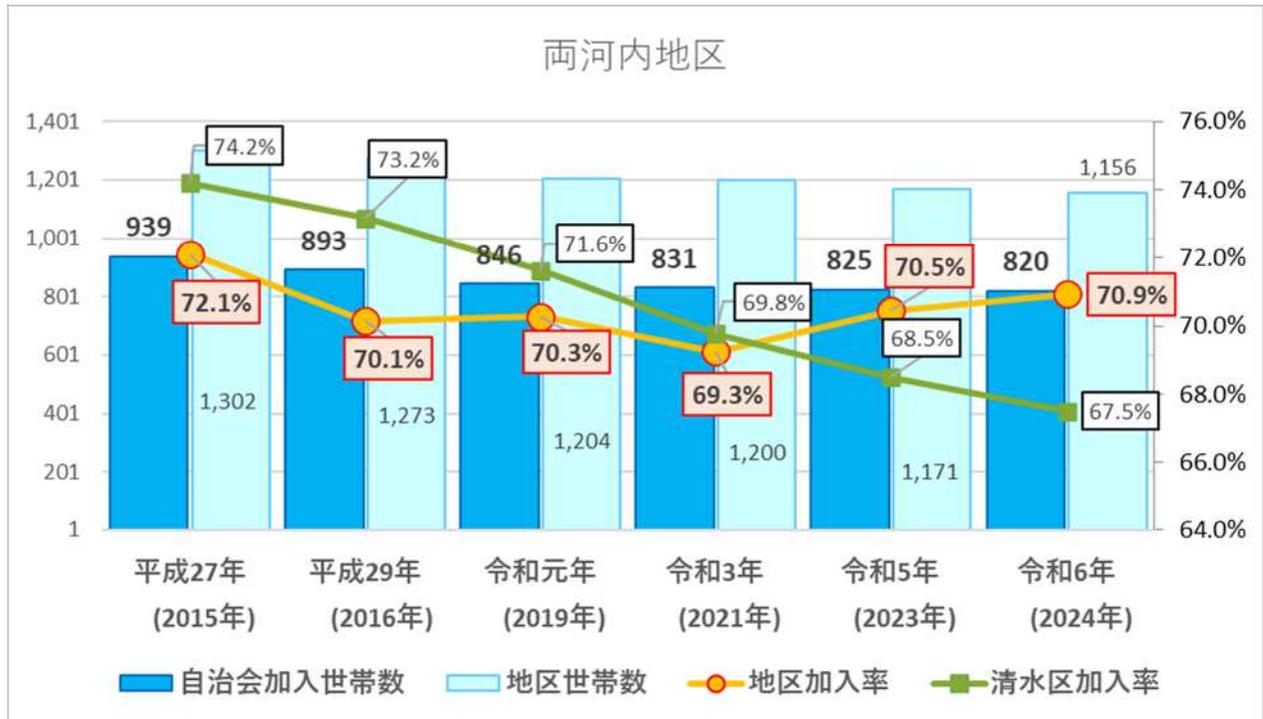
赤字 65歳以上、75歳以上の割合が高い場合

町名	令和6年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
大平	4.0%	40.9%	22.8%
清地	7.7%	51.0%	28.4%
河内	7.8%	48.4%	26.8%
茂野島	9.8%	47.4%	24.9%
高山	1.6%	54.7%	31.3%
葛沢	5.7%	43.6%	26.4%
土	2.7%	54.1%	32.4%
中河内	3.3%	45.5%	24.5%
西里	2.7%	49.5%	31.8%
布沢	9.5%	38.1%	23.8%
和田島	4.5%	46.7%	31.4%
両河内地区	5.2%	46.4%	26.7%
清水区	9.8%	33.0%	19.3%
静岡市	10.7%	31.1%	18.0%

●自治会加入状況

令和6年

加入率	地区	70.9%	加入世帯数	820世帯
	清水区	67.5%	住民基本台帳世帯数	1,156世帯



両河内地区コメント

- ・人口と世帯数とも減少傾向にあり、それに伴う世帯人口も減少し、過疎化が進みつつあります。
- ・人口減少割合は、静岡市の5.3%減に比べ、22.9%と大きく減少しています。
- ・14歳以下と65歳以上の割合は、14歳以下9.8%、65歳以上45.5%となっており、少子高齢化になっています。
- ・自治会加入率は区の値68%より高い70.9%となっています。令和3年まで市の値より低かったのが逆転しています。

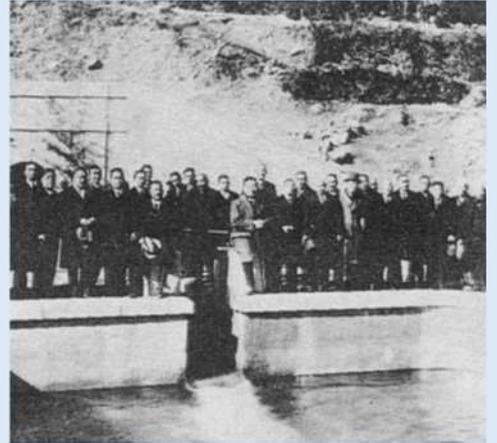
両河内地区

地名のゆかり

明治22年に、和田島、清地、中河内、河内、大平など、付近の村が合併し、両河内村が誕生しました。河内とは川に沿った平地を意味しますが、庵原郡誌によると、「地形上、昔から西河内（河内、大平など）、中河内と大別して呼ばれていた2つの地域が合併するから“両河内”と名付けた」ということです。

ここの歴史は古く、古文書には「日本武尊東征の折、尊は陣を河内神楽石に定めた」と述べられています。下って戦国時代には、永禄12年（1569）、「武田信玄は、北條氏と薩峠をはさんで戦い、清地、和田島、茂野島、大平、徳間峠を経て、甲州へ帰った」と史書にあります。西河内の小字「貝伏」（甲斐武士）は、この名残です。

江戸時代に入ると、この地方は江戸にも駿府にも近いので、そのほとんどが旗本の知行地や天領（幕府の直轄地）として、幕府の直接支配を受けました。



清地水源地湧水式（昭和7年）

大石の碑

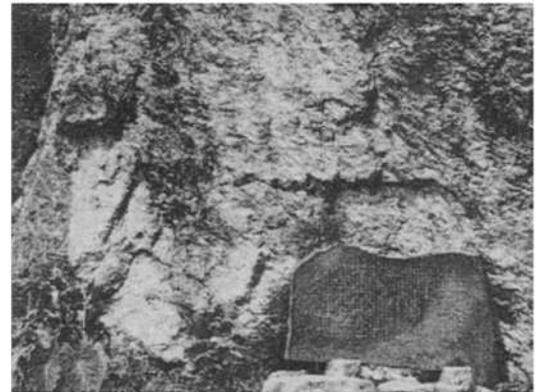
興津川の上流、河内の真富士山ろくに、高さ19m、周囲60mに及ぶ大きな石があります。

ここにある碑には、次のような大石の由来が書いてあります。安政元年（1854）11月4日正午、突如起こった大地震は真富士連山を揺るがせ、岩石を跳ばし、樹木を倒して、山容を一変させてしまいました。この恐怖がまだ覚めない翌年7月、今度は豪雨が襲い、地震で崩れた土砂を押し流し、村に大きな被害をもたらしました。一夜明けて、翌日は一点の雲もない好天気。村人は、そこに大きな巨石を見つけ、大変驚きました。

地震に続くこの災害によって悲嘆にくれる村人の有り様を見かね

た神職の小沢岩見守清磨が、人々に何かと希望を与えようと、この石に「高御産巢日神」と「神産巢日神」を祀って、神の加護を祈りました。以来、村の生産は進み、村人たちは希望に満ち、幸せに暮らしたということです。その後、いつのころからか、この石は安産の御利益があるとも言われ、誰ともなく安産石と呼ばれるようになりました。

碑は、昭和41年に河内自治会の人々が中心になって建てたものです。



大石の碑

貝伏（甲斐武士）集落

貝伏は、昔、甲斐武士と書きましたが、徳川の世に改めたとされています。西里の西北の山の中にある集落で、天正10年（1582）に武田氏が滅亡し、その家来深澤小次郎がのがれて、この地にかくれ住み、他の家臣と共に土着して今日に至っています。

下里川石上に深澤小次郎の墓があります。同じ所に滝御前宮という社があります。これは、甲斐の一武士が高さ5丈余りもある滝の前で、敗軍を無念とし、「敵に命をとらるるは武士の不面目」と自害したといわれる武士を祀ったものです。また、ここにある「御前の滝」は徳川勢の総ぜめのおり、「敵にはずかしめられるよりは」と自ら白刃を口に投身した、ある武将の妻のいわれであると言い伝えられています。

鎮札(ちんさつ)神社

今から300年前、大平に産ろうという病気が流行りました。これは妊産婦だけが死亡するという恐ろしい病気で、大平には赤ちゃんも若いお嫁さんもいなくなっていました。

そこで、大徳院という占い師が卦をたててみると、武田氏の怨霊がきつねになって、たたっていることが分かったため、彼は身を清めて一心にお祈りし、それを退治しました。おかげで村には再び赤ちゃんの泣き声が響いて、村人の表情も明るくなりました。

しかし、それから3年後、このきつねがまた暴れ出しました。暴風雨の明けた朝、拾った箱を開けると、必ず大熱が出てしまうのです。

困った村人たちは、京都に上って御利益のある神様を迎えることにしました。このとき、鎮札神社に祀られたのが神功皇后と日本武尊とされています。



鎮札神社

四十坂

両河内地区の布沢と庵原地区の吉原を結ぶ、40箇所近くも曲りくねった山越えの道があり、「四十坂」と呼ばれています。

この道は、武田信玄が甲州の本拠地と江尻小芝城との連絡を図るため、永禄年間(1558~1570)に開いたものと伝えられていますが、いかにも軍用道路らしく巧妙に造られています。また、約2キロの坂道を、夏でも汗を流さずに登ることができるそうです。

現在も車が通れないような細い山道ですが、明治時代の終わりごろまでは、両河内と庵原、江尻方面を結ぶ最も重要な幹線道路でした。



布沢側の入口付近

「小河内の紀州水」

徳川家康の側室、お万の方は、日蓮宗を信仰していました。たびたび身延の総本山久遠寺へお参りに行っていました。

当時は身延山の奥の院へは女人禁制で入山できませんでした。お万の方は「信仰心に男も女もない、滝で身を清めれば誰でも身延山に登れるようにしてあげよう」

こうしてお万の方のはからいで、女の人も入山できるようになりました。

お万の方が身を清めた滝は「お万の滝」と呼ばれ、滝近くの橋のたもとにはお万の方の像も建立されています。これは七面山にある白糸の滝のことです。

お万の方の息子徳川頼宣は、紀州の国の初代の殿様で、家康の10番目の子供です。頼宣は母の亡き後、年に1度、甲州街道を通して身延にお参りに行くようになりました。

一行は、街道を通るとき、小河内の商家で休憩をとりました。お茶を出すためによい水を探すと、丸山という家の水がまるやかで美味しいとわかり、この水でお茶を出したところ、頼宣はとても喜び、この後毎年身延へ行き帰りに丸山のお茶を召し上がったと言われます。

そんなことから、この湧き水を紀州の殿様の名をとって「紀州水」と呼ぶようになったそうです。

この水は今でも湧き出ています。

